



環境リモートセンシング 研究センター

Center for Environmental Remote Sensing

Newsletter No.198

千葉大学環境リモートセンシング研究
センター ニュースレター 2022年5月
発行：環境リモートセンシング研究センター
(本号の編集担当：齋藤尚子)
住所：〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33
Tel: 043-290-3832/Fax: 043-290-2024
URL: <https://ceres.chiba-u.jp/>

大学院リモートセンシングコース入試説明会の開催報告

令和4年5月28日に、千葉大学大学院融合理工学府地球環境科学専攻リモートセンシングコースのコース説明会兼大学院入試説明会を開催しました。

昨年度はオンラインツールを用いた開催でしたが、コロナの状況が落ち着きつつあること、直接、対面で行うことのメリットも大きいであろう、とのことで、今年度は、現地開催+オンライン開催を同時に行いました。現地参加16名、オンライン参加22名の計38名の参加があり、非常に盛況であったと思っております。

我々が所属するリモートセンシングコースの一つの強みは、「環境」+「リモートセンシング」の専門家集団による体系的・集団的な指導体制であると考えています。大気・陸域を中心にした環境問題に対して、「リモートセンシング」を共通のキーワードとしてアプローチをしています。今回のコース説明会では、各研究室から概要紹介があり、本コースでどのような研究分野を扱っているのか、ということを含めてみることができる機会になればと考えておりました。また、現地参加の方々は、興味のある研究室の状況、研究設備などを直接見ることができたかと思っております。

今回は、8月の受験予定者に加えて、2年生・3年生といった将来受験を検討する方々の参加もあり非常に頼もしく感じました。次年度も引き続き開催する予定ですので、多くの方々の参加をお待ちしております。



コース説明会の様子

(市井和仁)

雨上がりの土曜日、木洩れ日の構内で一番熱気にあふれていたのは、間違いなく環境リモートセンシング研究センター102講義室でした。会場とオンラインの参加者、専任の先生方と一部研究室の学生さん。皆さんからあふれるドキドキ感が伝わってきます。

2020年から始まったCOVID-19の影響は根強く、リモセンコースの入試説明会も2020年度は中止を余儀なくされました。しかし、収まりきらない苦境もものともせず「オンライン開催(2021年度)」、「対面・オンラインのハイブリッド開催(2022年度)」と進化し続けています。

セッションが始まると、日本語の説明に続いて英語でのアナウンスもありご配慮も細やかです。初のハイブリッド研究室訪問は実施経験がなく心配されましたが、各研究室での工夫により参加者からも好評だったようです。アンケート結果から「様々な研究内容を聞いて非常に勉強になった(会場参加者)」「各研究室の特色を説明した後に興味のある研究室ごとに詳しい説明が聞けるシステムは良いと思いました(オンライン)」「大変有意義なセッションでした(オンライン)」「非常に興味深い情報を得ることができました(海外参加)」と喜ばれた様子が見えます。

逆境をばねに飛躍するCEReSが、木洩れ日のようにまぶしい午後でした。

(リモートセンシングコース事務・渡辺玲奈)

■ ■ 文部科学大臣表彰・若手科学者賞の受賞 ■ ■

～ 小槻研究室通信・第 17 号～

この度、「大規模数値計算と衛星観測データ同化による地球環境予測研究」に対する研究成果で、科学技術分野の文部科学大臣表彰・若手科学者賞に選出して頂きました。本研究を進めるにあたり、共同研究者の皆様大変お世話になりました。この場をお借り、厚く御礼申し上げます。

ところで私の研究しているデータ同化分野では最近、「粒子フィルタ」が注目されています。これまでのアンサンブルカルマンフィルタや変分法では、予測・観測誤差のガウス分布性を求めてきましたが、そういった仮定を考慮していないのが特徴的なフィルタです。この粒子フィルタを長年研究してきた Peter Jan van Leeuwen 教授が、2019 年に出版した粒子フィルタの Review 論文は、この様な書き出しから始まります。

Data assimilation for geoscience applications, such as weather or ocean prediction, is a slowly maturing field (van Leeuwen et al. 2019; QJRMS).

この記述を読んだとき、自分が感じていたモヤモヤを、的確に言語化されたような感覚になりました。その感覚とは、「徐々に成熟を迎えつつある地球科学分野に、未だフロンティアは残っているのか？」という素朴な疑問です。経験科学とは永遠に終わりのない社会構成的な営みですが、どの分野にも創成期・成長期・成熟期が存在する様に思います。この「フロンティアは残されているのか？」という問いは、同年代では、脳科学や制御数理といった様々な分野の研究者から共感を得られます。多くの経験科学分野が、徐々に成熟期を迎えてきているのかもしれない。

私が研究者を志した学生当時は、ただただ問題を解く楽しさを享受していました。プロの研究者になり、自己の好奇心追及に加えて、自身の一連の研究は分野の中でどんな意味を持つのか、科学的意義を考えるようになりました。そして教員になり、分野を活性化させるにはどうすれば良いかを、最近考え始めました。毎年の様に引き起こされる気象・水災害が示す通り、災害予測・緩和研究はプラクティカルにまだまだ必要です。その一方で、若者が或る分野に惹かれる理由は、「なんとなくの魅力」であり、その魅力は分野に残されたフロンティア=大きな問題の有無にかかっているのではないかと思います。

今回栄えある賞を頂いたのは、私自身の力よりも、重要な問題を準備して与えて頂いた、指導者や共同研究者の皆様のお陰だと思います。私自身も、この分野の中での大きな問題・挑戦を見つけ、研究の感動や技術を、次世代の若手研究者に伝えられる教育者に努力・研鑽を重ねたいと思います。

(小槻峻司)



令和 4 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の伝達式の様子 (令和 4 年 5 月 23 日: 学長室にて)